

## 第5回 阿賀川自然再生モニタリング検討会 議事要旨

開催日時：平成31年3月18日（月）13:30～16:00

場 所：阿賀川河川事務所 1階会議室

### 【議事次第】

1. 開会
2. 副所長あいさつ
3. 議事（1）
  - ・第4回検討会のご意見と対応について
4. 議事（2）
  - ・阿賀川自然再生モニタリング結果について
5. 議事（3）
  - ・NPO会津阿賀川流域ネットワークの調査結果について
6. 議事（4）
  - ・その他
7. 閉会

### 【議事】

- (1) 第4回検討会のご意見と対応について
  - ・第4回検討会における意見と対応について事務局より説明し、承認された。
- (2) 阿賀川自然再生モニタリング結果について
  - ・礫河原面積の変遷について、事業完了後の平成27年出水後に出水による礫河原面積の拡大がみられるが、それ以前では出水による拡大はみられないということでしょうか。
  - ・基本的にそういう理解でよいと思う。事業前は比高差があり、みお筋を洪水が流れるだけであったが、事業により出水時の攪乱する力が強くなり、拡大していったと考えている。
  - ・礫河原の拡大は、事業箇所周辺だけなのか、それとも水の流れが変化するなどして事業箇所以外にも効果が波及しているのか。
  - ・事業箇所以外にも効果が波及し拡大している箇所がある。一方で樹林化している箇所もあり、そのような所では礫河原が拡大しにくいと思う。
  - ・事業によって、礫河原が再生されているというグラフということで了解した。
  - ・平成27年出水で、事業箇所以外で礫河原が拡大していると認識している。平成

28年以降の出水は規模から、礫河原が維持される程度のもと考えている。平成27年規模の大きな洪水が来れば礫河原が拡大すると思う。

- 平成25年度以前も平均年最大流量を超える出水が生じていたが、礫河原面積は数%しか拡大しておらず、事業による切り下げ等がなければ拡大しなかったのではないかと思う。
- 了解した。平成25年度以前も多少の拡大はあったのであろうが、計測できるほどのものではないのであろう。カワラハハコについては堆積しても再生するという話があり、阿賀川の礫河原一面に生えても良いと思うが、なぜ生えていないのか。興味がある。三本松地区の樹林化過程のイメージ図について、樹高は正確に表現されていないのか。理解のために大きさに表現されているということか。
- 横断図を水平方向に圧縮しているため、樹木群①の樹高が高く見えるが、横断図内の縮尺で樹高を表現している。
- 三本松及び南四合地区の礫河原ではヤナギ類の繁茂がみられるが、上流の飯寺及び上米塚地区ではあまりみられていないようだが、なぜか。三本松及び南四合地区の礫河原は川幅いっぱい広いが、飯寺及び上米塚地区は狭い。こういったことも関係しているのか。この点は、ヤナギ群落が繁茂する条件、また今後少ない手間で礫河原を維持していく手法検討の上で重要な部分である。
- 三本松及び南四合地区は礫河原が川幅いっぱい広がり、冠水頻度の低い箇所もまた広がり、そういった箇所でヤナギ類がみられている。上米塚地区においては、礫河原は狭いが、冠水頻度の分布でヤナギの生育箇所を重ねると冠水頻度の低い箇所でやはりヤナギ類が生育している。飯寺地区は河川工事によって樹木伐採等の改変が礫河原でありヤナギ類がみられていない状況である。
- 事務局より、別途、水理検討結果について報告をうけているが、出水時の流速分布及び河床面の掃流力分布とヤナギ類の生育位置に関係があるとのことであった。
- カジカの減少について、平成27年の出水前後で個体数の変化はみられているか。カジカの産卵期は水温の低い3月頃であり、フクドジョウも北海道の種であることから、水温の低い時期にも活発に活動し影響を与えているかもしれない。ウケクチウグイについては、本モニタリングで稚魚がウグイの群れに混じってワンドで確認されたという重要な知見が得られた。県内ではこの水系のみの生息であるが、未成魚及び成魚の生態については課題として残っている。生息環境であるワンド・淵については、今後のモニタリングの際の調査項目にその形状の大きさの計測を入れてもらいたい。河川工事について、礫を残す、淵を残す、産卵期には濁りを出さないということを念頭に、多様な河川環境を保全しながら工事してもらいたい。

- 今後の長期モニタリング計画案において、「必要に応じて、樹木伐採等の維持工事を…」という記載があるが、具体的に判断基準はあるのか。伐採してもしなくてもよいという意味に捉えられないか。
- 定期的に伐採するという案もあるが、今後の出水状況によって判断することとしている。
- 意味合いとしては、「継続的に」ということだと思う。予算の関係もあると思うので、言葉の表現として修正するかは事務局の判断に任せる。
- チドリ類の調査方法について、全域踏査とあるが、全て踏査しているのか。各年度、全域に満遍なく産卵箇所が分布しているわけではなく、産卵箇所が偏っているようにみえる。
- 礫河原内を全域踏査して確認している。地区によっては地元住民等の出入りが多いことが関係している印象をうける。親鳥は確認されるが繁殖は確認されない状況であった。最下流の会津大橋地区は、礫河原内への人の出入りが少なく毎年産卵が確認されている状況であった。
- 小動物類について、「阿賀川周辺を広く利用している」と記載があるが、確認されている種のほとんどは、阿賀川を一時的に利用しているだけで、生活史の全てを河川内で過ごす種は少ないと思う。また、スッポンについては、国内移入種の可能性もあり、今後も生息状況に留意してもらいたい。
- 「阿賀川周辺を…」という表現については指摘をふまえ修正する。
- 今後の課題としていくつか挙げられているが、どのように対応をしていくのか。また、長期モニタリング計画について、委員の意見をもらいたい。
- 長期モニタリング計画において、取り組んでいく。
- 長期モニタリング計画について、自然再生事業は治水上の課題解決から始まっているが、本検討会で議論してきた阿賀川らしさを忘れないようにしてもらいたい。とくに植物は生態系の基盤であり重要である。
- 長期モニタリング計画について、生物の調査だけでなく河道の変化についてもモニタリングすることも強調してもらいたい。例えば飯寺地区の河川工事をずっとしているが、工事の影響は上下流に波及し、生物の生育・生息環境に影響すると思う。そういったことも念頭に、治水と一体となったモニタリングであることを記載してもらいたい。河川工事により、治水上の課題解決とともに阿賀川らしさの回復が確認された好例であり、そういった文言を入れておいてもらいたい。
- 過年度の河川水辺の国勢調査結果では、阿賀川において多数の種が出現している。ヒクイナやクイナは近年減少傾向にあり、湿地環境を選好する種、ヤマシギは全国的にも珍しくなっている種、ツバメチドリは礫河原・草地等を選好する種等がみられている。長期モニタリング計画においては、礫河原環境だけでなく、こういった種も生息する懐の深い河川であることを念頭に調査をしてもらい

たい。

- ・ 地元住民向けの PR についても検討してもらいたい。

### (3) NPO 会津阿賀川流域ネットワークの調査結果について

- ・ 阿賀川は直轄区間約 30km の中で、いわゆる上流域、中流域、下流域がみられる珍しい河川である。出水の度に土砂の浸食、堆積、運搬を繰り返し河川景観はすぐに変化する。阿賀川以外の河川について、礫河原及び樹林の状況について現地視察した内容について報告する。利根川水系吾妻川の上越新幹線の橋の下流が、阿賀川の上流域に似た河川形態をしていた。中州に樹林が発達していたが、民地であるため、樹木伐採等の管理ができていない状況が見受けられた。阿賀川でも同様にそのような箇所が存在しており、そういったことが要因で樹林化の問題が生じていることも留意すべきと感じた。礫河原においても、礫の堆積具合から浸食、堆積、運搬を繰り返していることがうかがえた。信濃川の宮中取水堰周辺においても調査を実施する機会があったが、定期的に放流で冠水するような箇所でも樹木が繁茂している状況であった。樹木の繁茂は簡単には抑制することはできないとあらためて実感した。
- ・ 一番重要と思うのは、住民が頻繁に河川をよくみて意見を発信し、それを組み入れながら自然再生事業をやっていくことだと思う。
- ・ 発表を聞いて、長く 1 つの川を見続ける地元の人間の存在が必要であると感じた。それに住民が加わって行政に意見を発信していくことが重要と思う。また、定期的に意見交換会などを開催し、長期モニタリングの状況についても意見交換していく形がよい。

### (4) その他

- ・ 事務局より「阿賀川における河道内樹木伐採（国土強靱化 3 ヶ年緊急対策）の進め方（案）」を説明した。
- ・ 樹木伐採について、今後検討委員と協議しながら詳細な伐採計画について検討していくこととしたい。